

アオメエソ *Chlorophthalmus albatrossis*



アオメエソは「めひかり」と呼ばれます。これは、写真左のように目が大きく、見る角度によって目が黄緑色に見えるためです。普段、この魚は頭と内臓を取り除き、干物として流通することから（写真右）、体全体を見ることはあまりありません。土佐湾で漁獲される種類のほとんどはアオメエソですが、大型で口が大きく、体高が高いトモメヒカリという別種も少量水揚げされます。

生物特性

アオメエソは福島県から鹿児島県の水深150～450m（高知県では水深125～400m）に分布する深海魚で、その生態には謎が多く、どこで成熟して、産卵しているのかすら分かっていません。

高知県におけるアオメエソの生態は独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所高知庁舎が詳しく長期的に調査しています。その結果によると、土佐湾に生息するアオメエソは年齢0～3歳の未成熟個体で、秋に標準体長約5.0cmで出現した後、15.0cmまで成長しながら漁獲され、その後、土佐湾から姿を消します。

各年齢の標準体長は、満1歳が8.5～9.0cm、満2歳が12.0～12.5cm、満3歳が14.5～15.0cmです。生息水深は成長とともに食性を変えながら深場へ移動し、1歳までは水深200m以浅、1歳が150～300m、2歳以降になると200～350mです。

食性は基本的小きあみ類を主食としますが、小型個体はかいあし類等の小型甲殻類、大型個体は魚類やえび類も捕食します。

資源動向

過去41年の高知県におけるアオメエソの漁獲量は、昭和47年（1972年）に289トンと最も多く漁獲された後、その後は概ね100トン前後で推移しています。過去20年の平均漁獲量は127トンでした。最近で

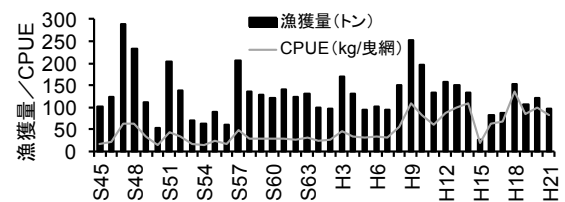


図1 高知県産アオメエソの漁獲量と漁獲効率 (CPUE) の推移 (昭和45年～平成21年)。

は、平成9年（1997年）に253トンと多く水揚げされました。資源の状況は、漁獲努力量を考慮して、1 曳網あたりの漁獲量（CPUE、図1）の推移から、水準は「中位」、動向は「減少」と考えられます。

県内の漁獲動向

高知県では、アオメエソは中央部（御畳瀬・浦戸）に基地がある沖合底びき網漁業で漁獲されます（図2）。本種は沖合底びき網漁業全体の漁獲量の10～30%（20年間の平均は18%）を占め、ニギスに次いで漁獲量が多い重要な魚です。

高知県の沖合底びき網漁業は5～9月が禁漁のため、漁期は10月～翌年4月となっています（図3）。月別のアオメエソ漁獲量を見ると、9月までの休漁期の後、漁期が始まった10月の漁獲効率（1 曳網あたりの漁獲量、CPUE）はニギス等を主に漁獲するために低いのですが、11月以降は40kg／曳網で安定します。このように、漁期を通して比較的漁獲量が安定していることもアオメエソがこの漁業にとって大切である理由の一つです。



図2 沖合底びき網漁船（1 そうびき）.

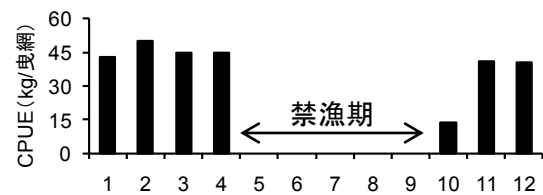


図3 沖合底びき網漁業のアオメエソ漁獲の月別平均CPUE（S45～H21）.